

論文

非暴力直接行動を再導入する
—ガンディーと私たちの未完の脱植民地化—

Reintroducing Nonviolent Direct Action:
Gandhi's and Our Unfinished Decolonization

福本 圭介*

FUKUMOTO Keisuke

キーワード： ガンディー、非暴力、直接行動、脱植民地化、贈与の力

Key words: Gandhi, nonviolence, direct action, decolonization, power of giving

1 非暴力直接行動とは何か？

2011年3月に始まる東京電力福島第一原発の放射能公害事件以来、民衆による反原発の非暴力直接行動がさまざまな場所で高まりを見せ、非暴力の思想と運動の潜在力が今あらためて問われている。あるいは、沖縄でも、辺野古で、高江で、日本国政府による暴力的な米軍基地建設の動きを止めようとする民衆のやむにやまれぬ座り込みが今日も続いている。また2012年9月末には、日本国政府によるオスプレイの普天間基地への強制配備があり、人びとは身を投げ出して抵抗した。あるものは基地のゲート前で互いに腕を組んで座り込み、あるものはゲート前に駐車した車の下にみずからの身を横たえた。これは、民衆の非暴力直接行動によって米軍基地が封鎖されるという驚くべき出来事となった。民主主義が踏みにじられた場所で、あるいは構造的な暴力が露出した場所で、今多くの人びとが身体をはって何かをくい止めようとしている。そして、ドキュメンタリー映画『標的の村』（2013年）が的確に記録しているように、そのような場所では人びとの歌がうたわれているのである。¹ これらはすべて、日本の戦後史のみならず、この国の近代化の歴史そのものを根本から批判し、それとは別の世界をみずからの力で創出しようとし

* 新潟県立大学国際地域学部 (fukumoto@unii.ac.jp)

ているかにみえる人びとの身振りである。私たちが現在、目の当たりにしている非暴力直接行動には、「暴力を行使しない直接行動」という型通りの定義ではつかまえられない深さと強さがある。非暴力直接行動とはいったい何なのか。何に根ざし、どこへ向かっているのか。ここにそれを考えるためのひとつの手がかりになると思われる言葉がある。

あなたのおこなう行動が、ほとんど無意味だとしても、それでもあなたは、それをやらなければなりません。それは世界を変えるためにではなく、あなたが世界によって変えられないようにするためにです。

この言葉は、20世紀前半に植民地インドにおいて反植民地主義の運動を牽引したモハンダス・カラムチャンド・ガンディー（1869-1948）によるものとされている。とはいえ、出典は不明である。正確には、ガンディーの言葉として長く人びとによって語り継がれてきた「人びとの言葉」だろう。この言葉は、3.11以後、ネットを中心にさまざまな場所で引用されているが、今私たちが目の当たりにしている非暴力直接行動の大事な部分をすくいとっているように思われる。² 世界にとって意味があろうがなかろうが、世界が変わろうが変わるまいが、それを失っては全てが台無しになってしまうようなあなた自身のために行動は存在するのだとこの言葉は語っているのである。いま私たちの社会は、例えば、「国益」や「安全保障」という名のもと、あなたを「あなた」ではなく「それ」とみなし、人間を目的ではなく手段とみなす暴力をあたかも自明のものとしている。そして、私たち自身も、このような視線を無意識に内面化し、自発的にそのような暴力に奉仕しているかもしれない。しかし、この言葉は静かに語るのである。それでも、本当の行動とは、あなたをあなたとして存在させようとするあなたの行動として始まるのだと。

私たちはこうしてあらためて植民地インドにおける反植民地主義、反帝国主義のアクティヴィストであると同時に政治思想家でもあったガンディーに否応なく立ち戻ることになる。ガンディーこそ、非暴力直接行動を、たんなる社会変革の道具としてではなく、人間の存在の根っこにある「魂」にかかわる実践として再定義した思想家だからである。ガンディーにとって、インドの脱植民地化は、民衆たちの「魂」を根本から救出することなしにはありえなかった。「たとえ世界を手に入れたとしても代わりに魂をなくしてしまうのなら、いったい何になるというのでしょうか」。³ ガンディーにとって非暴

力直接行動とは、政治目的を実現するためのたんなる手段ではなく、人びとの「存在そのものと切り離すことのできない部分」だったのである。⁴しかし、まさにそうであるがゆえに、非暴力直接行動は、植民地主義、帝国主義を根本から批判し、その基礎をその根っこから作り変えてゆく手段ともなりえたといえる。

本論文の目的は、ガンディーの著作を内在的に読み解くことによって非暴力直接行動とよばれる行動の深さと強さについてあらためて考察することにある。ガンディーは、非暴力直接行動を、どのような実践として把握していたのか。そこにどのような可能性と潜在力を読み取っていたのか。そして、それはいったい何に根ざしていたのか。私たちが未だに継続する植民地主義、帝国主義の問題圏の内側にいることを考えるとき、この問いは強いアクチュアリティをもって私たちに迫ってくる。

2 スワラージとは何か？

ガンディーが非暴力直接行動をどのような実践としてとらえていたかを考えるためには、ガンディーがその政治目標とした「スワラージ」についてまず考えなくてはならない。ガンディーは、非暴力直接行動を何よりも「スワラージ」を実現するための手段として考えていたからである。「スワラージ」(swaraj)とは、もともと「みずから」(sva)の「支配」(raj)、つまり「自己支配」や「自己統治」を意味するグジャラート語の言葉である。ガンディーは、この言葉を、植民地主義、帝国主義を根底から批判するために、まったく新しい概念として作り直した。ガンディーがインド独立運動における中心的存在であったのは1919年から1940年代にかけてであるが、この間のガンディーの政治目標を一語で表現するならば、まさにこの「スワラージ」ということになる。⁵では、ガンディーにとって「スワラージ」とはどのような理念だったのか？

ガンディーは、1909年に『インドの自治』(Hind ^{スワラージ} Swaraj)を執筆・発表し、そこでみずからの「スワラージ」の理念をはじめて本格的に展開した。それまでインド独立運動にかかわる多くのナショナリストたちにとって、「スワラージ」とは、政治的には、インドの近代国家としての「独立」(independence)、あるいは、大英帝国の内部での一定の自治権の獲得を意味した。⁶しかし、ガンディーはそのようなナショナリストたちの解釈を退け、

この言葉を、民衆の非暴力の行動によって創設される「自治」(self-rule)を表す言葉として再定義するのである。⁷「非暴力」は、もともと、ヒンズー教、ジャイナ教、仏教のなかに「非殺生」(ahimsa)という宗教原理としてあったものであるが、ガンディーは、これを植民地主義、帝国主義に対する根本的な対抗原理として再発見した。そして、それをインド独立運動の核心部分にセットすることによって「スワラージ」の意味を大きく変えてしまうのである。いったいこの背後にはどのような思考があったのか。

20世紀はじめ、インドは、大英帝国による植民地支配のなかにあった。しかし、ガンディーには、近代国家としての「独立」がインドの民衆にとって問題の解決になるとは考えられなかった。なぜなら、「独立」を実現し、自前の政府を持ったヨーロッパ諸国においても「自治」は存在せず、民衆たちは支配層によって搾取されていたからである。ガンディーは、『インドの自治』のなかでヨーロッパの民衆たちについて「労働者たちの状態は動物以下になっています」⁸と語っている。ガンディーは、1926年9月にも新聞『ヤング・インディア』(Young India)紙上で次のように語っている。

ヨーロッパの諸国民は、確かに政権はもっています。しかし、スワラージがまったくないのです。⁹ (強調は筆者)

植民地インドに広がる暴力の網の目は、近代文明の原理として実はヨーロッパ諸国の内側にも巣くっていた。宗主国と植民地のあいだに支配－被支配の関係があるのと同様に、宗主国の内側にも強固な支配－被支配の関係があったのである。他方、インド国内においても権力が集中した大都市と農村のあいだには支配－被支配の関係があり、また、同じような関係は、地主と農民のあいだにも、身分制度のなかにも、男女のあいだにも存在した。したがって、たとえインドが独立したとしても、そこに支配－被支配の構造が残存し「搾取」が続くかぎり、民衆はなんら暴力の網の目から解放されることはなかったのである。

ガンディーは、インドもヨーロッパも根本的には同じ「近代文明」(modern civilisation)という「病」のなかにあると考えた。¹⁰そして、植民地支配のただなかで、そのような「病」からの治癒を模索したのである。「スワラージ」はまさにそのような観点から構想された理念だった。ガンディーは、近代文明の根底に「搾取」(exploitation)という体系的な暴力を見た。

「搾取こそが暴力の本質である」。¹¹そして、そこからの離脱（自立）を「スワラージ」という言葉に込めたのである。ガンディーは、1941年にも次のように語っている。

私の定義では、搾取が存在しているかぎり、本当のスワラージはありません。イギリス人による支配がインド人による支配に変わっただけでは、スワラージとは言えないのです。ある階級が別の階級を支配しているかぎり、そして貧しき人々が貧困状態にとどまっていたり、さらに貧困化したりする現実があるかぎり、スワラージなどありません。¹²

ガンディーは、大英帝国による植民地支配やインドの大都市による農村支配の根本に「搾取」の構造を見て取った。そして、貧困とは、ほかでもないこの「搾取」の結果だった。ガンディーは、「搾取」をしばしば「組織化された暴力」（organized violence）と呼んだが、これこそが根治すべき病の正体だった。¹³したがって、ガンディーにとって「スワラージ」とは、「民族独立」などではありえなかった。「スワラージ」とは、搾取なき民衆自治、「組織化された暴力」から離脱（自立）を意味したのである。

しかし、ここでひとつの疑問がわく。ガンディーがインド独立運動のうねりのなかに身を投じた20世紀前半は、第一次世界大戦が象徴する帝国主義の時代であると同時にロシア革命の時代でもあった。¹⁴ガンディーが「搾取」や「階級」という言葉を語るとき、同時代の社会主義や共産主義の思想についてはどう考えていたのだろうか。ガンディーのスワラージの理念はそれらとどのような関係にあったのか。ガンディーは、1934年9月に「私的所有」と「国有」の両方を批判しながら、社会主義国家について次のように語っている。

それ〔国有〕は、私的所有よりはましです。しかし、それも暴力という理由で反対すべきものです。もし国家が暴力によって資本主義を抑え込めば、国家それ自体が暴力の渦に巻き込まれてしまい、いかなるときも非暴力を発展できなくなってしまうというのが私の強い確信です。国家とは、集中化され、組織化された形態をとった暴力の典型です。個人には魂がありますが、国家は魂なき機械です。国家を暴力から引き離すことはけっしてできません。国家はまさに自らの存在根拠を暴力に

負っているからです。¹⁵（括弧内は筆者による補足、強調は筆者）

ここでは、社会主義国家だけでなく、国家という存在そのものに対するガンディーの率直な意見が語られている。ガンディーは、搾取という「組織化された暴力」を強いる資本主義に対して批判的であり、そこからの離脱（自立）を求めている。しかし、同時に、ガンディーはそれを国家という組織体を通して実行することには反対だった。ガンディーにとって、国家とは「集中化され、組織化された形態をとった暴力の典型」であり、それ自体「組織化された暴力」だったからである。「暴力による対抗によって暴力が消滅することはない」というのがガンディーの根本認識だった。¹⁶ ガンディーは、1930年に、インド植民地総督だったアーウィン宛の手紙のなかで次のような言葉を書いている。

大英帝国政府の組織化された暴力に対抗できるのは、組織化された非暴力しかありません。¹⁷（強調は筆者）

ガンディーが植民地主義のただなかで作り出そうとした「スワラージ」とは、まさにこの「組織化された非暴力」（organized non-violence）だったと言ってよい。ガンディーから見れば、インドがたんなる「独立」を目指すことは、植民地主義の暴力に対抗しつつも、インド自身がもうひとつの「組織化された暴力」に転化してゆくことだった。それは不可避免的に国家の暴力と資本主義の暴力の両方を内在したものとなっただろう。したがって、それは決してガンディーの政治目標とはならなかった。また、社会主義国家もガンディーの選択肢にはなかった。資本主義の暴力を国家の暴力によって押さえ込むことも、インドが「組織化された暴力」に巻き込まれてゆく道だったからである。ガンディーは、脱植民地化のプロセスにおいて、「国家」と「資本主義」の両方に抵抗する必要があった。言い換えれば、ガンディーは、民衆たちに、軍事的な暴力と経済的な暴力の両方から離脱（自立）しつつ、同時にみずからがそのような「組織化された暴力」に転化しないような「自己統治」（self-rule）を求めた。ガンディーは、どうすればインドの民衆たちが根本的に植民地主義、帝国主義の暴力から解放されるかを考えたが、そのなかで生み出された「スワラージ」の理念とは、あくまで「組織化された非暴力」によって、「組織化された暴力」からの離脱（自立）を実現すること

だったのである。

3 なぜ、非暴力なのか？—贈与の力

ガンディーの「スワラージ」のヴィジョンは、「国家の独立」や「社会主義国家」を求める当時のインドのナショナリストたちの展望とは明確に異なるものだった。ガンディーにとって重要なのは、もうひとつの近代国家を作り出すことではなく、「組織化された暴力」から脱するために、それに対抗しうる「組織化された非暴力」を民衆自身の非暴力の行動と活動によって作り出すことだったからである。ここには、手段と目的をめぐるガンディーの透徹した思考があった。ガンディーはけっして「スワラージ」が暴力的な手段によって実現できるとは考えなかった。あるいは、本質的な意味での「脱植民地化」（de-colonization）は、暴力的な手段によっては実現できないと考えた。例えば、彼は次のように語っている。

大規模にインドを武装させることは、インドをヨーロッパ化させることです。そうすると、インドの状況は、ヨーロッパの状況と同じほど、悲惨なものになってしまうでしょう。¹⁸

ガンディーは、武装すること、軍隊を保持すること、あるいは、近代国家を創設することがたんなる手段だとは考えなかった。それは必ず目的（結果）に影響を与えてしまうからである。ガンディーは、略奪や搾取の構造のない社会システムは、非暴力の行動や活動によってのみ創設可能だと考えた。なぜか。ガンディーは、『インドの自治』のなかで手段と目的の関係について次のように書いている。

手段と目的の間にはいかなる関連もないとあなたは信じていますが、大きな間違いです。（…）あなたの推論は、有毒な雑草を植えてバラを得ることができると言っているのと同じです。（…）手段は種子に、目的は樹木に、例えることができます。そして、種子と樹木の間に関連があるのと同様に、手段と目的の間には、犯すことのできない関連があるのです。¹⁹

ガンディーにとって手段を選ぶことは、目的を選ぶこととほとんど同義だった。なぜなら、手段と目的のあいだには強い結びつきがあり、手段が変われば、目的（結果）が変わってしまうと考えたからである。どのような種類の「種子」を蒔くかがどのような種類の「樹木」を手にするかを決定するように、手段の選択は目的を規定するというのである。スワラージが「樹木」だとすれば、それを手に入れるためには、軍事力や武力ではなく、どうしても非暴力の行動という「種子」が必要だった。では、非暴力の行動とは、いったいどのような手段なのだろうか？それは、暴力的な手段とはどのように異なるのか？

もう一度、『インドの自治』を参照してみよう。ガンディーは、この著書のなかで、手段が変われば目的（結果）が変わってしまうことを「強奪」、「購入」、「懇願」という三つの手段を例にして説明している。²⁰ 例えば、誰かが所有するある時計を獲得しようとする場合でも、この三つの手段によって異なる三つの結果が生じるというのである。つまり、「強奪」によって獲得すれば、その時計は「盗品」となり、「購入」すれば「財産」となり、「懇願」によって手にすれば「贈り物」となると。手段が目的（結果）に与える影響を明快に論じたこの部分には、なぜあえて非暴力という手段を選択するのか、また非暴力とはどのような手段（力）なのかという問いに対するガンディーの思考も同時に読み取れる。

ガンディーは、独立を達成するための手段の重要性を繰り返し強調したが、それは、異なる手段を選べば、結果として異なる関係性がそこに形成されるからだった。同じ時計を獲得するという目的でも、「武器」を使った場合、「貨幣」を使った場合、「懇願」を行った場合では、そこには異なる関係性が個人（行為者）と個人（元所有者）のあいだに形成される。同様のことが、インドの独立に関してもいえる。手段が異なれば、そこには異なる関係性が組織される。ガンディーは、スワラージは「武器」や「貨幣」という手段（力）によっては獲得できないと考えた。なぜなら、「武器」と「貨幣」こそが近代文明と植民地主義を組織する力であり、その行使は不可避的に同様のものを再生産することにつながるからである。では、ガンディーがスワラージの実現に必要不可欠と考えた非暴力直接行動は、どのような手段として考えることができるだろうか。これを考えるヒントが、上記の三区分別にある「懇願」という言葉にあると思われる。

ガンディーによれば、「懇願」とは、目的物を「贈り物」（a gift）として

得る手段であるが、重要なのは、「懇願」という行為がそのような「贈り物」を交換するような関係性を他者との間に創設することである。もちろん、懇願したからといって「贈り物」が得られるとはかぎらない。しかし、少なくとも、懇願は、「奪う」（武器）のでも「買う」（貨幣）のでもない仕方では他者に関係し、他者との関係性を形成しようとする。「懇願」のコミュニケーションにおいて重要なことは2点ある。1つは、「懇願」は、他者を手段としてではなく、目的として扱うことである。「懇願」は、行為者自身の人格そのものを手段とすることによって、他者に一人格としての選択をせまるのである。2つ目は、「懇願」が、達成すべき目的を（「盗品」や「財産」ではなく）他者からの「贈り物」として受け取るということである。「懇願」には、いわば「贈与」がもつような強制力が存在するのだといっていいだろう。贈与は、一般に、与えられた側に負債の感覚を生じさせ、返礼の必要性を意識させるが、「懇願」もある種の贈与として他者に与えられ、相手は「返礼」（贈り物）を迫られるのである。

「懇願」と同様のことが、おそらく、非暴力直接行動と呼ばれる行為にもいえる。後に述べるように、非暴力直接行動は、いわゆる「懇願」が聞き入れられない時に開始される「非協力」であり、正確には、「懇願」のリミットとしてあるが、その行為の基本的な形式は変わらない。例えば、ガンディーは、何度か重要な政治的場面で「断食」を行った。「断食」においては、断食者のいのちそのものが手段となり、説得すべき他者は決定権をもった人格として立ち現れる。非暴力直接行動も、行為者の人格としての存在を手段とすることによって、他者に一人格としての選択をせまるのである。また、「断食」や「座り込み」、「デモ行進」にもある種の強制力が存在するが、これは「武器」や「貨幣」の強制力とはまったく質の異なるものである。素手で何ももたずに武器に立ちあがる個人をイメージしてみよう。ここにあるのも、根本的には、「贈与」がもつような強制力ではないか。非暴力直接行動もある過剰な「贈与」として他者に与えられ、相手は「返礼」（贈り物）を迫られるのである。

このように、非暴力直接行動とは、本質的には、「奪う」のではなく「与える」ことによって他者との新しい関係性（つながり）を創出しようとする「贈与の力」として考えることができる。とはいえ、もちろん、インドの植民地支配は、基本的に、「武器の力」（軍事力）や「貨幣の力」（経済力）をもとにした権力によって構築されていた。例えば、植民地における国家機

構は、「武器の力」（軍事組織と官僚制によって可能になる強制力）によって支配－被支配の権力関係をつくり、徴税による略奪と再分配のシステムを構築していた。あるいは、植民地経済は、「貨幣の力」によって形成した体系的な権力を通して上層における資本蓄積を実現していた。植民地支配を支えていた関係性とは、このように、人間を手段（それ）とみなし「強奪」、あるいは「搾取」の対象とするような関係性だった。したがって、ガンディーが求めたのは、このような関係性を生み出す暴力的な手段を選ばないことであり、それとは別の手段によって別の関係性を創出することだった。そして、その創出の手段を、「武器の力」でも、「貨幣の力」でもない、非暴力直接行動（贈与の力）に見出したのである。

ガンディーは『インドの自治』のなかで非暴力の行為を説明するために次のような寓話を使っている。自分の家に繰り返しやってくる泥棒に、わざと品物を持って行きやすいように置いておき、それによって、その泥棒が最終的には心を入れ替え、その家に仕えるようになるという話である。²¹ できすぎた話だとも思うかもしれない。しかし、後に述べるように「贈与の力」は、「武器の力」や「貨幣の力」と同様に、この世界を構築している現実的でありアルな力のひとつである。「奪う」のでもなく、「買う」のでもなく、「与える」ことが非暴力直接行動の核心にはある。そして、この積極的な贈与の行為こそが、「奪う」、「買う」がけっして形成できない質の権力（協同を可能にする個人と個人の関係）を作ってゆくのである。

4 スワラージを創出する

非暴力直接行動は一種の「贈与の力」として考えることができ、スワラージはそのような「贈与の力」が創設する権力を基礎にして作られる。しかし、ガンディーが直面していた植民地支配の現実とは、国家と資本が作りあげた権力を基礎とする強固な「組織化された暴力」のシステムだった。インド人民衆は大英帝国によって統治されつつ、体系的に搾取されていたのである。実際、植民地インドにおける税収の5分の1は、大英帝国の資産に加えられ、本国費、鉄道など投資の利子、軍事費として帝国支配のために使われた。²² また、インドは、イギリスの産業資本を支える安価な原料（綿）の生産地としてだけでなく、その資本蓄積を支える工業製品（綿織物）の市場としても利用された（それによってインドの手工業は破壊され、多くの失業者が発生

した）。このように、インドの多くの農民たちは、植民地政府による徴税とともに、宗主国－植民地、都市－農村、地主－小作人といった支配構造が支える植民地経済によって苦しめられていたのである。では、人びとは、安易な「懇願」が通用しないこのような「組織化された暴力」の構造をどのようにして解体し、別の関係性を作り出そうとしたのか。

4－1 非暴力的非協力

ガンディーは、植民地支配を支えている「権力」はインド人の「協力」によって構築されていると考えた。したがって、民衆たちが植民地支配に対する「協力」を撤回すること、すなわち「非協力」（non-co-operation）を実行すれば、植民地支配は解体するというのがガンディーの考えだった。²³ ということか。例えば、ガンディーは、なぜイギリスがインドを植民地化できたのか、なぜ今もインドは植民地として維持されているのかという問題に対して『インドの自治』のなかで次のように書いている。

イギリス人がインドを取ったのではありません。私たちがインドを彼らに与えたのです。イギリス人たちは自力でインドにいるのではなく、私たちがいさせているのです。（…）イギリス人は当時、王国を設立する意図は少しもありませんでした。会社〔東インド会社〕の役人たちを助けたのは誰でしたか？彼らの銀を見て誘惑されたのは誰でしたか？彼らの商品を買ったのは誰でしたか？それは全て私たちだったと歴史が証言しています。²⁴（括弧内の補足は筆者）

ガンディーは、植民地インドの権力を生み出しているのは、根本的には、イギリスの軍事力や経済力ではなく、それらを支えている無数のインド人自身の行動だと考えた。税金を払う、軍隊に保護を求める、みずから官僚、警官、兵隊になる、イギリス製の商品を買う、イギリスの工場で働く、イギリスの学校で学ぶ、イギリスの文化を称賛する、インドの生活様式を劣ったものとする、このような態度と行動の総体、つまり植民地のシステムに対する「協力」（自発的服従）が植民地支配を支えていると考えたのである。²⁵ もちろん、ガンディーは、弁護士や医者など、英語を話すインドの都市における植民地エリートの協力を最も問題化したが、「非協力」というインド人民衆の自律的行動（self-rule）によって植民地の権力は自壊するという展望をガ

ンディーは打ち出したのである。

ガンディーがインドの脱植民地化の運動に本格的に身を投じるのは、1919年からであるが、例えば、この年、彼は「ハルタル」（一斉休業）と呼ばれる一種のゼネストを実行する。²⁶ インドの民衆たちは、祈りと断食の日として一日活動を停止し、みずからが活動を停止すれば、植民地インドも活動を停止することを経験する。こうして「非協力」は高まりをみせてゆく。ガンディーの最初の構想では、「非協力」は、次の4段階のボイコットを含むものであった。称号の返上、官職のボイコット、警察・軍の職のボイコット、それに税金のボイコットである。²⁷ 1920年のインド国民会議では、官職、警察、軍、税金のボイコットは回避されたが、称号の返上、学校、裁判所、参事会のボイコット、外国製品のボイコット、民族学校と仲裁法廷とカーディ（手紡ぎの糸を使った手織り布）の奨励などからなる行動計画が決議された。²⁸ このように、暴力に頼らず、「協力」の撤回によって内側から権力を解体しようとする直接行動をガンディーは、「非暴力的非協力」（non-violent non-cooperation）と呼んだ。²⁹

しかし、「非暴力的非協力」は、「組織化された暴力」を終わらせようとするたんなる政治的手段ではなかった。それは、それに参加する個人にとっては、ある倫理的な次元をともなう行動だったからである。ガンディーは搾取に対する「非暴力的非協力」について次のように語っている。

搾取はすべて、自発的なものであらうと、強制的なものであらうと、搾取される人間の協力が基礎にある。どれだけ認めるのを嫌がるとしても、人びとが搾取者に従うのを拒否すれば、どんな搾取であらうと消滅するという事実がある。とはいえ、利己心（self）が入ってきて、私たちは自分を縛る鎖を抱きしめてしまう。これを終わらせなくてはならない。³⁰

植民地インドで搾取されている民衆は、「組織化された暴力」の犠牲者だった。しかし、民衆たちは、見方を変えれば、「組織化された暴力」を支えている協力者でもあった。例えば、安価な外国製品を買うこと、あるいは、インドの工場で生産された製品を買うことこそが、自分や隣人たちを困窮化させる植民地経済を再生産していたからである。ここで私たちはあらためてガンディーの「非暴力的非協力」がどのような行動であったか考えることができる。「非暴力的非協力」とは、たんなる政治的手法ではなかった。それは、

運動に参加する個人にとっては、「組織化された暴力」という悪に加担しないことであり、自分や他者を犠牲にするシステムから降りるという決意だった。ガンディーは、「利己心」ではなく「魂」との対話を追求するこのような諸個人の行動がスワラージの「種子」となると考えた。ガンディーはスワラージを“self-rule”という言葉で定義したが、スワラージとは、「利己心」（self）を「制御」（rule）する諸個人の行動として始まり、そのような「贈与」がさらなる「贈与」を呼び込み、それまでの権力とは質の異なる（対抗）権力を創出していくプロセスとなったのである。³¹

4-2 建設的プログラムとチャルカー運動

スワラージを実現するためには、「組織化された暴力」を解体してゆく必要があったが、同時に民衆たちはそれとは異なる新たな社会関係を組織してゆく必要もあった。そこで、ガンディーは、スワラージを実現するために達成すべき具体的な課題を「建設的プログラム」（Constructive Programme）としてまとめ、焦点化した。そこには、先に言及した「カーディ」（手紡ぎ糸を使った手織り布）の生産・使用の奨励にとどまらず、インドを構成している70万の農村の産業の再建、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の宗教対立の解消、不可触民制の撤廃、女性の地位向上などが含まれた。³² これらは、すべて「組織化された暴力」を支える様々なレベルでの支配-被支配の関係をそれとは別の関係へと変革しようとする非暴力直接行動のプログラムだった。非暴力直接行動は、植民地支配のシステムを停止・解体させるという否定性だけでなく、それとは異なる社会を創出するという積極性の側面も併せ持っていたのである。

ここでは、「チャルカー」（手紡ぎ用の糸車）を回して糸を紡ぎ、自らの手で布を織るという民衆たちの行動を例にとり、非暴力直接行動がスワラージを生み出してゆく建設的な力でもあったことを確認しておきたい。ガンディーは、チャルカーは「非暴力の象徴」であり、「搾取と支配を取り除く方法」だと述べた。³³ ということか。糸車を回して糸を紡ぐという行為がどのようにして搾取なき民衆自治の創設につながるのか。ガンディーは、インドの自治を支える経済構造について1928年に次のように述べている。

私の考えでは、インドの経済構造は、これは世界についても同じですが、誰一人として食料および衣類の欠乏に苦しまないようなものにするべき

です。言い換えれば、すべての人が生活をやりくりできる仕事があるということです。そして、この理想は、どこであっても実現可能です。ただし、生存にどうしても必要なものを生み出す手段は、民衆たちが掌握しておく必要があります。このような手段は、誰でもが使えるようにしておくべきなのです。天からの恵みである空気や水がそうであり、そうでなくてはならないのと同じです。³⁴

ここで語られているのは、インドのあるべき経済構造についてのガンディーの根本認識である。ガンディーは、衣食などの人間の生存にどうしても必要なものは、巨大な資本に依存せず、民衆自身が自分で生産できる手段を確保しておくべきだと考えた。チャルカーは、まさにこのことにかかわっていた。ガンディーは、「どの人にも生きる権利があります」³⁵と語り、これが彼の経済学の根底にあったが、この権利を蝕んでいたのが、工場生産を拡大するイギリスやインド大都市の産業資本だった。特権的な階層が生産を独占することによってインドの農村における手工業は壊滅し、さらに民衆は農業（原料の生産）による収入すら工場製品を消費することで吸い上げられていた。³⁶ ガンディーはこれに対し、消費者としてボイコット（非暴力的非協力）で対抗すると同時に、生産者として生活必需品を生産する手段を農村の民衆の手に取り戻そうとする運動を始める。この中心にあったのがチャルカー運動である。³⁷ ガンディーは、あらゆる人が手にすることができ、けっして誰からも奪われることのない生産の道具としてチャルカーを再発見した。そして、そこから農村の産業を再構築し、植民地経済から自立した経済システムを作る種の「協同組合」として作ってゆこうとしたのである。³⁸ 1925年に設立された「全インド手紡ぎ協会」（All India Spinners' Association）、あるいは、1934年設立の「全インド農村産業協会」（All India Village Industries Association）は、このような運動を促進し、相互連携しようとする組織だった。

ガンディーは、スワラージを実現するには、それを可能にする経済的な基盤が必要だと考えた。そして、最終的には、そのためには、インドの70万の村落に農業と手工業によって自給自足が可能な自立的な経済システムを作ってゆくことが必要であると考え、その中心にチャルカー運動を位置づけたのである。³⁹ 「チャルカーは、非暴力的な経済の自給自足のシンボルである」。⁴⁰ 「組織化された暴力」から自立しようとするこのような実践を

どのように始めてゆけばよいかについて、ガンディーは1935年に新聞『ハリジャン』において次のようにきわめて平易な言葉で語っている。

一人ひとりが、毎日利用するあらゆる食料、衣類、その他を吟味して、外国製品や都市製品を、村人たちが自分の家や畑でつくった生産物に取り替えてゆくことができます。簡単に使用・修理ができる単純で安価な道具を用いた生産物へと取り替えてゆくことができるのです。⁴¹

自分で糸を紡ぎ、布を織ることは、誰にでも利用できる手段を使って自分たちの生存に必要なものを自分たち自身で作り出すことだった。これは、自分たちの生存の基盤を外部の力に依存することなく自分たちの協力によってコントロールできるということを意味した。したがって、外国や大都市の工業製品を、徐々に自分の隣人たちが作った品物へと取り替えてゆくことは、自分たちを苦しめる植民地経済のシステムに依存も加担もせず、生存の質そのものを根っこから作り直してゆく実践となった。ガンディーは、このような村落における諸個人の自律的な行為の組織化を通して搾取なき自立した経済システムを作ってゆこうとしたのである。

糸車を回すことは、たんなる象徴的な行為ではなかった。それは、その他の非暴力直接行動と同様に、「組織化された暴力」を止めつつ「組織化された非暴力」を形成してゆくための具体的な実践だった。そして、それは、自分と隣人たちへの、そして来るべき共同体への「贈与」だったといってもいいだろう。ガンディーは、植民地の権力を構成している一人ひとりの民衆たちのレベルに踏みとどまり、そこでの非協力的かつ建設的な行動を通して、底辺から具体的に植民地主義を作り変えてゆこうとしたのである。

5 サッティヤグラハ：魂の力、真実の力、愛の力

5-1 良心に根ざす行動：魂の力、真実の力

これまで見てきたように、非暴力直接行動はスワラージを実現するための手段だった。しかし、同時に、非暴力直接行動は、スワラージを実現するためのたんなる手段ではなかったというべきである。非暴力直接行動は、それ自体で小さな「自治」（self-rule）の実現であり、それ自体で達成している水準があったからである。ガンディーは、非暴力直接行動を「サッティヤグ

ラハ」、「魂の力」、「真実の力」、「愛の力」とさまざまな名前と呼んだが、それを『インドの自治』のなかでは次のように簡潔に定式化している。

良心に反する行動を拒むときに、私は魂の力を使う。⁴²（強調は筆者）

ここで、ガンディーは、「魂の力」（非暴力直接行動）を、スワラージから定義するのではなく、「良心」から定義している。非暴力直接行動とは、「良心に反する行動」を拒否することだと。ここで重要なのは、非暴力直接行動が、自分の行動に介入する行為として定義されていることである。それは、もちろん他者や社会に関わる行為なのだが、根本的には、良心に反する自分の行動に介入する行為なのである。したがって、非暴力直接行動は、他者や社会に働きかける前に、行動の主体それ自体に変革をせまることとなる。非暴力直接行動は、その当の行動の誕生の瞬間において、行為の主体を構築している自己関係そのもの—自己の自己自身に対する関係—を行為遂行的に変えてしまうのである。ガンディーは、自分の奥深くにある「良心」をしばしば「静かにつぶやく声」（still small voice）と表現しているが、それと自分の関係について次のように語っている。

この世で、私が唯一受け入れる暴君は、心の内なる「静かにつぶやく声」です。たとえ、独りの少数派になる見通しに直面しなくてはならないとしても、自分にはそのような望みなき少数派になる勇気があることを私は謙虚に信じます。私にとって、それが唯一の正直で嘘のない態度だからです。⁴³

ここには、非暴力直接行動を始める時に「主体」が抱える不安と確信の両方が述べられている。「良心」とは、心の奥深くで「静かにつぶやく声」であるが、心の内でけっして静まることのない「暴君」（tyrant）でもある。それは、実行が困難な無理難題（当為）を「主体」にしつこくせまるため、日常生活のなかでは、心の奥底に抑圧され、軽視されている。しかし、それは、静かにではあるが執拗に「主体」につぶやきつづける。そして、非暴力直接行動は、「主体」がそのような「暴君」を否応なく「受け入れる」という出来事として始まるのである。こうして、それまで心の奥底でノイズのように「それ」として否認されていた部分が、「私」を通して語り始める。もちろ

ん、このような出来事は、「私」を社会的に困難な場所に連れ出すだろう。それまで、行動を通して権力に与えていた協力を撤回することによって「私」は権力に抵抗する存在になるからである。「私」はもはやそれまでの行動をしない。あるいは、それまでの行動とは逆行するような行動を始める。これは、強い否定性の表現である。しかし、「私」はそのとき、身を低くしつつ、みずからの身体を通して「良心」を肯定しているのである。あるいは、「良心」のほうが「私」を深く肯定しているのだといってもいい。ここにはそのような「魂」との関係（つながり）が生まれている。主体はそのとき、「利己心」（self）を放棄し、もはや主体ではなくなるだろう。しかし、「良心」を受け入れるという生成変化（transformation）のなかで、「良心」が「私」を救い出すのである。ここに、強い肯定性が生まれる。ガンディーは、なぜそのような選択をするのかという理由として、それが「唯一の正直で嘘のない態度」（the only truthful position）だからだと述べている。これこそが、ガンディーの政治哲学の核心にある思想である。ガンディーは、「良心」という心の奥底にひそむ暴君に応答する行動を選択するなかに、根源的な平安と「魂」の救済を見出すのである。こうして、「良心」に対して「正直で嘘がないこと」（truthfulness）は、ガンディーにとってあらゆる行動の根本原理となる。そしてここにある肯定性（魂の力soul-force、真実の力truth-force）を出発点にしてすべてをここから始めようとするのである。

5-2 愛の力：世界の基礎を作り直す

非暴力直接行動は、たった一人による行動であろうと、それ自体で、ひとつのスワラージ（自治）の創設である。あるいは、非暴力直接行動は、つねにスワラージの最小単位として誕生するのだといってもよい。ガンディーは、植民地主義、帝国主義の本質を「組織化された暴力」に見出し、そこからの離脱（自立）をスワラージという言葉で表現したが、非暴力直接行動とはまさにそのような離脱であり自立だからである。しかし、重要なことは、非暴力直接行動は、たった一人による行動であろうと、それまで抑圧されていた「良心」（魂）を行動の中心に据えることで、「私」と「他者」を同時に救おうとする力として誕生するということである。非暴力直接行動が、「魂の力」、「真実の力」と呼ばれると同時に「愛の力」（love-force）と呼ばれる理由がそこにある。これは、暴力、つまり、他者を目的（あなた）ではなく手段（それ）として扱う力とは根本的に異質な力である。非暴力直接行動は、

「他者の犠牲」(the sacrifice of others)ではなく、「利己心の犠牲」(the sacrifice of self)、つまり、みずからの存在そのものを手段とすることによって、「私」も「他者」も救い出そうとする「贈与の力」なのである。⁴⁴

しかし、そのような「愛の力」(贈与の力)は、しばしば偽善的であると揶揄されたり、あるいは非現実的な力として軽視されてきた。ガンディーの時代もそうであったし、現在も同じである。そのような世界観のなかでは、「武器の力」(軍事力)、あるいは、「貨幣の力」(経済力)のみが世界を構成する現実的な力として認められる。何がこの世界のリアリティなのか、何がこの世界を作り上げている力なのかという議論のなかで、「愛の力」はつねに軽視されてきたといってよい。世界は暴力で満ちており、暴力のみが真のリアリティなのだ。しかし、これこそが帝国主義、植民地主義が作り上げたイデオロギーなのではないかと疑う必要がある。私たちは、資本や国家の視点から世界を見ることに慣らされすぎているのではないかと。ガンディーはそのような暴力を根底におく世界観に異議を唱える。ガンディーは、『インドの自治』のなかで、「世界の基礎」について次のように書いている。

世界にまだこんなにも多くの人間が生きているという事実は、世界の基礎が武器の力ではなく、真実の力、つまり愛の力であるということを示しています。それゆえ、愛の力の成功を示す最も強力で申し分のない証拠は、世界に生じた数々の戦争にもかかわらず、世界が未だに存在しているという事実に見出すことができます。⁴⁵

ガンディーは、「愛の力」こそが、世界の基礎をつくっている力であると主張する。戦争であろうと、軍事力であろうと、「愛の力」がなければ、存在すらできないだろうと。「もし、愛の力の存在がなかったら、世界は消滅してしまうでしょう」。⁴⁶ ガンディーが注目しているのは、これだけの殺戮や搾取にもかかわらず、世界を継続させている人間のいとなみ、つまり、生まれてくる命を救い、助け、育てるといふ人びとのやむことのない贈与(への応答)である。当然のことだが、世界は、「武器の力」や「貨幣の力」だけで作られているのではない。世界の基礎は、自然からの贈与や人間相互の「愛の力」にあり、本当はそれなくしては誰一人として大人にすらなれない。⁴⁷

ガンディーは非暴力直接行動を「魂の力」、「真実の力」、あるいは「愛の力」と呼んだが、非暴力直接行動を私たちの「世界の基礎」をつくっている力

に根ざしたものとして考えていたことがわかる。つまり、それは特別な力ではなく、「世界の基礎」を作り上げている力と同じものである。したがって、非暴力直接行動の力とは、私たちの存在そのものの力である。私たちの存在そのものが、暴力を阻止し、別の関係性を創出する力を潜在させているのである。とはいえ、この世界は、現在も植民地主義、帝国主義の時代から継続する国家や資本の暴力に圧倒されている。そのようなとき、私たちは、そのような暴力を阻止する力として、私たちの存在そのものを世界に「贈与」する。そして、そのような「贈与」によって、新しい世界の基礎を、自治の最小を、今、ここに現実に誕生させるのである。⁴⁸

6 結びにかえて

私たちは、非暴力直接行動とは何か、その強さと深さとは何かという問いから出発した。現在、非暴力直接行動は、一般に、なんらかの政治的な目的を実現するための「暴力を使わない」手段、あるいは、なんらかの意思を表現するための手段として理解されている。それは確かに手段であり、例えば「武器の力」とはまったく異なる目的を潜在させた手段ではある。しかし、非暴力直接行動をガンディーの脱植民地化の運動の文脈にあらためて置き直してみると、それはたんなる政治的手法ではなかったということが明らかになる。非暴力直接行動とは、スワラージの創設を目的としつつも、それ自体でひとつの「自治」の創設であり、「組織化された暴力」からの離脱と自立を実現することだったからである。そして、非暴力直接行動とは、私たちの存在そのものを世界に「贈与」することによって自己自身との関係と同時に他者との関係を根本から作り直してゆくような「贈与の力」だったのである。

とはいえ、周知のように、ガンディーが着手した脱植民地化の運動は未完である。1947年のインド独立は、ガンディーが実現しようとしたものとはほど遠かった。二国家に分裂した独立は、民衆のあいだに想像を絶した相互殺戮と対立をもたらし、さらに国境問題はインド、パキスタン両国の軍事化を激化させた。そして現在もグローバルな権力と結びついた「組織化された暴力」は残存しており、それに対する対抗運動も終わることなく形を変えて継続している。

ただし、ここで重要なのは、インドやパキスタンのみならず、この列島に

生きている私たち自身もまた、未だ、ガンディーが近代文明の「病」とみなしたものの内側にいることである。沖縄の基地問題や福島原発事故問題は、このことをはっきりと示している。したがって、ガンディーの未完の脱植民地化は、私たち自身の未完のプログラムでもある。今、非暴力直接行動は、「自治」が存在しない場所で絶望の叫びとして発生している。しかし、これは同時に「自治」を創出しようとする人びとの全身全霊の「贈与」でもある。ガンディーは、このような始まりの場所に立ち続けた。彼が繰り返し主張したように、非暴力直接行動が表現する力は、世界に存在するもっとも根底的でリアルな力のひとつであり、もっとも能動的で自発的な力である。私たち自身をけっして見離すことなく、世界を繰り返し始まりへと連れ戻してくれるのは、この力だけのように思われる。

注

- 1 『標的の村』（三上智恵監督、2013年）は、沖縄の東村高江における反基地の座り込み運動とオスプレイ配備に反対する沖縄県民による非暴力の普天間基地封鎖に寄り添った貴重なドキュメンタリー映画であり、本稿を執筆するインスピレーションの重要な一部となった。
- 2 例えば、ほんの一例として、滋賀県高島市のグループ「さよなら原発 高島の会」のブログ（2011年6月9日）でもこの言葉がガンディーの言葉として引用されている。東日本大震災から3ヶ月目の2011年6月11日に「さよなら原発！高島パレード」が開催されたが、その2日前にこの言葉がアップされたようである。
http://nonuke-takashima.blogspot.jp/2011/06/blog-post_09.html（2013年11月22日アクセス）。
- 3 1946年8月25日付『ハリジャン』紙に掲載されたある会議でのガンディーの講演録のなかの言葉。*The Collected Works of Mahatma Gandhi*, vol. 91 (New Delhi: Publications Division, Ministry of Information and Broadcasting, Government of India) 389. 以下、*The Collected Works of Mahatma Gandhi*は、CWMGと略記する。このガンディー全集には、オンライン版があり、文献はすべて以下のサイトで読める
<http://www.gandhiserve.org/cwmg/cwmg.html>。
- 4 Gandhi, *My Non-violence* 36. 「非暴力に関しては、偽善的なうわべだけの言葉はなしにしましょう。それは、自由に着たり脱いだりできる衣類のようなものではありません。非暴力の座は、心のうちであり、それは、私たちの存在そのものと切り離すことのできない部分でなくてはなりません。」（強調は筆者）
- 5 石坂 44-45.
- 6 Dalton 2-3.
- 7 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 116-117. 本稿の注31も参照。
- 8 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 35.
- 9 Gandhi, *My Non-violence* 15-16. 初出は、*Young India* (September 3, 1925)。
- 10 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 33-37.
- 11 Gandhi, CWMG, vol. 77, 43. 初出は、*Harijan* (November 4, 1939)。
- 12 Gandhi, CWMG, vol. 81, 187. 1941年10月12日の発言。
- 13 例えば、1940年にガンディーは新聞『ハリジャン』（1月20日）上で次のように語った。「国そのものと同じくらい古くからある村々のインドか、外国支配の産

- 物である都市のインドか、私たちは選択しなくてははいけません。今日の都市は、村々を支配し、富を奪っており、村々は崩壊しつつあります。（…）村々を搾取することそれ自体が組織化された暴力なのです。もし、非暴力に基礎をおくスワラージを欲するなら、私たちは村々に適切な地位を与えなくてはなりません」（*CWMG*, vol. 77, 216、強調は筆者）。
- 14 長崎「戦争の世紀と非暴力」266.
 - 15 Gandhi, *Selected Political Writings* 136. あるいは、*CWMG*, vol. 59, 316-319.
 - 16 例えば、ガンディーは、「原子爆弾とアヒンサー」という文章でこの議論を展開している（*Harijan* 7 Jul. 1946, *CWMG*, vol. 91, 221）。福本「非暴力の力とは何か」184-185も参照。
 - 17 Fischer 266.
 - 18 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 75.
 - 19 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 79.
 - 20 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 80.
 - 21 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 80-82. 本稿の注48も参照されたい。『グラン・トリノ』も、非暴力と「贈与の力」をめぐる寓話である。
 - 22 長崎『ガンディー：反近代の実験』86-87.
 - 23 この用語は、『インドの自治』の段階では存在しない。ガンディーが「非協力」（non-co-operation）という言葉そのものを思いついたのは、1919年のカリフ擁護会議での席上だという（長崎『ガンディー』135-136）。
 - 24 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 38-39.
 - 25 ラミス 55-60.
 - 26 サルカール『新しいインド近代史I』254-264.
 - 27 サルカール『新しいインド近代史I』266.
 - 28 サルカール『新しいインド近代史I』267.
 - 29 1941年にもガンディーは、「非暴力的非協力」について次のように語っている。「これは本性上敗北することのない手法です。自発的なものであろうと、強制的なものであろうと、犠牲者の一定程度の協力なしにはいかなる略奪者も目的を果たすことはできないという知識にこの手法は基礎をおいています」（Gandhi, *My Non-violence* 159）。
 - 30 Gandhi, *All Men are Brothers* 124、あるいは、Gandhi, *CWMG*, vol. 64, 202. これは、1934年7月の発言で、初出は、*Amrita Bazar Patrika*, 22-7-1934.
 - 31 ガンディーは、「スワラージ」を明快に次のように定式化している。「本当の自治（home-rule）とは、自己支配（self-rule）、あるいは自己制御（self-control）である」（Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 116）。ガンディーは近代文明の特徴を「道徳」の欠如として認識していたが、「スワラージ」とは諸個人の行動のレベルでそれを回復してゆこうとする運動だった。
 - 32 「建設的プログラム」の具体的な内容については、古瀬 157-166に詳しい。また、1945年に再刊された *Constructive Programme: Its Meaning and Place* は、以下の文献に収録されている。Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 169-180.
 - 33 Gandhi, *CWMG*, vol. 84, 356. （1944年9月3日の発言）
 - 34 Gandhi, *CWMG*, vol. 43, 161.
 - 35 Gandhi, *CWMG*, vol. 15, 274.
 - 36 Gandhi, *CWMG*, vol. 65, 409.
 - 37 ガンディーは、このような運動の総体を「スワデシ」（swadeshi）と呼んだ。「スワデシ」は、語源的には、「みずから」（sva）の「国」（deśa）を意味するが、ガンディーのスワデシは、外国製品のボイコットを中心とした従来型の「国産品愛用運動」とは異なり、本質的には、搾取なき経済システムを民衆の協力によって構築しようとする運動だった。
 - 38 ガンディーは、1926年に、自分は手紡ぎを通して世界最大の「協同組合」（cooperative society）を作ろうとしているのだと発言している（*Young India*, 10-6-1926）。チャルカー運動の歴史的な展開と実態の分析は、石井「マハートマ・ガ

- ンディーの経済思想—チャルカー運動の再評価」に詳しい。
- 39 この自給自足的な村落経済に基づく民衆自治のヴィジョンは、ガンディーが暗殺される直前に執筆した「憲法草案」にも表れている（CWMG, vol.98, 335）。
- 40 Gandhi, CWMG, vol. 84, 345. (1944年9月の言葉)
- 41 CWMG, vol. 66, 114-115. 初出は、*Harijan* (25-1-1935)。
- 42 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 88. (強調は筆者)
- 43 Gandhi, *All Men are Brothers* 131. 初出は、*Young India* (March 2, 1922)。
- 44 ガンディーは『インドの自治』のなかで、soul-force（魂の力）とbody-force（身体の力）を対立させながら次のように述べている。「それ〔魂の力〕は利己心の犠牲（sacrifice of self）を含みます。利己心の犠牲が他者の犠牲よりも無限に優れていることは誰もが認めることです。」（*Hind Swaraj and Other Writings* 89）。ガンディーの“sacrifice of self”という言葉を「自己犠牲」という日本語に翻訳すると誤解をまねく可能性がある。みずからの「良心」、つまり、他者との関係性に固執する自分の「魂」を救い出すためにこそ“self”が放棄されるからである。したがって、ここでの“sacrifice of self”は、「利己心の犠牲」と訳されるべきである。
- 45 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 87.
- 46 Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings* 87. また、ガンディーは、近代文明そのものを「私たち」に寄生する生物として見る興味深い視点を持っていた。「この文明は、私たちの機嫌をとりながら、実は私たちにかじりついているネズミのようなものです」（*Hind Swaraj and Other Writings* 42）。
- 47 諸国家の理不尽きあまりない暴力に対抗する力として、「慈しむ力」（love-force）を対置させた映画に『爆心 長崎の空』（監督：日向寺太郎、2013年）がある。この映画は、原爆の暴力をモチーフに、物語は現代の長崎を舞台に展開されるが、1945年8月9日の、今日から明日へとなめらかに続くはずだった無数の人びとの日常を一瞬で灰にした暴力に対して、廃墟の中で名もなき赤ん坊を拾いあげ、育てた女性の行為を対置させる。観客は、現代の長崎の風景を目に浮かべながら数々の問いを反芻することになる。誰が、無からこの世界を作りあげたのか、無数の命を育ててきた力とは何か、（自らを）「慈しむ力」の根源には何があるのか。数々の問いを問いかけながら、この映画は「慈しむ力」を「贈与の力」として、暴力に対する最大の対抗として表現しようとしている。
- 48 「贈与の力」によって「武器の力」を基礎にした世界が解体される希望を描いた映画として『グラン・トリノ』（*Gran Torino*、監督：クリント・イーストウッド、2008年）がある。この作品は、現代のアメリカ中西部を舞台に、老いた朝鮮戦争の退役軍人とモン族の若者との交流を描くが、「武器の力」を基礎にした世界に「贈与の力」が介入し、「武器の力」を基礎にした世界そのものが自己解体する様子が描かれている。しかし、この作品が描く重要なことは、そのような「武器の力」の自己解体そのものが大きな「贈与」として新しい世界の基礎になりうるという希望である。非暴力の力を「贈与の力」として考察するうえで欠かすことのできない傑作である。

参考文献

- チャタジー、パルタ「ガンディーと市民社会批判」『サバルタンの歴史—インド史の脱構築』竹中千春訳。東京：岩波書店、1998年。
- Dalton, Dennis. *Mahatma Gandhi: Nonviolent Power in Action*. New York: Columbia University Press, 1993.
- Fischer, Louis. *The Life of Mahatma Gandhi*. New York: Harper & Row, 1983. (『ガンジー』古賀勝郎訳。東京：紀伊國屋書店、1968年.)
- 福本圭介「非暴力直接行動とは何か—モントゴメリーのバス・ボイコット運動から考える」『変容するアメリカ研究のいま：文学・表象・文化をめ

- ぐって』小林憲二編. 東京: 彩流社、2007年.
- . 「非暴力の力とは何か—ガンディーのサッティヤーグラハから考える」『20世紀の思想経験』細井保編. 東京: 法政大学出版局、2013年.
- 古瀬恒介『マハートマ・ガンディーの人格と思想』東京: 創文社、1977年.
- Gandhi, Mohandas Karamchand. *All Men are Brothers: Autobiographical Reflections*. Ed. Krishna Kripalani. New York: Continuum, 1984.
- . *An Autobiography, or, The Story of My Experiments with Truth*. Trans. Mahadev Desai. London: Penguin, 2007. (『ガンジー自伝』蠟山芳郎訳. 東京: 中央公論新社、2004年.)
- . *The Collected Works of Mahatma Gandhi* 100vols. New Delhi: Publications Division, Ministry of Information and Broadcasting, Government of India. (Online Version: <http://www.gandhiserve.org/cwmg/cwmg.html>)
- . *Hind Swaraj and Other Writings*. Ed. Anthony J. Parel. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- . *My Non-violence*. Ed. Sailesh Kumar Bandopadhyaya. Ahmedabad: Navajivan Publishing House, 1960. (『私の非暴力』全二巻. 森本達雄訳. 東京: みすず書房、1997年.)
- . *Selected Political Writings*. Ed. Dennis Dalton. Indianapolis: Hackett Pub. Co., 1996.
- ガンジー、M.K.『ガンジー・自立の思想』田畑健編. 片山佳代子訳. 東京: 地湧社、1999年.
- 石井一也「ガンディー死後の『ガンディー主義』—独立インドにおける『民主主義』の不可欠の構成要素として」『香川大学法学部創設二十周年記念論文集』東京: 成文堂、2003年.
- . 「マハートマ・ガンディーの経済思想—チャルカー運動の再評価」八木紀一郎編『非西欧圏の経済学』東京: 日本経済評論社、2007年.
- . 「ガンディー研究の批判的考察—ガンディーによる近代批判の理解をめぐる」『香川法学』第29巻第3・4号 (2010年3月).
- 石坂晋哉『現代インドの環境思想と環境運動: ガンディー主義とくつながりの政治』京都: 昭和堂、2011年.
- 柄谷行人『世界史の構造』東京: 岩波書店、2010年.
- 長崎暢子『ガンディー: 反近代の実験』東京: 岩波書店、1996年.
- . 「戦争の世紀と非暴力—マハートマ・ガンディーとインド民族運動」『戦争と平和—未来へのメッセージ』(岩波講座 世界歴史 第25巻) 油井大三郎他著. 東京: 岩波書店、1997年.
- ナンブーディリッパードウ、E. M. S.『マハートマとガンディー主義』大平孝平訳. 東京: 研文出版、1985年.
- ラミス、ダグラス『ガンジーの危険な平和憲法案』東京: 集英社、2009年.
- 酒井隆史「『治癒』としての暴力と非暴力」『フォーラム現代社会学』第10号 (2011年6月).
- サルカール、スミット『新しいインド近代史—下からの歴史の試み』(I & II) 長崎暢子他訳. 東京: 研文出版、1993年.

